

「資本論を読む会」便り

2025.8.23 No. 101

7月は、次の箇所を読みました。

第Ⅰ部：第1篇 第1章 第3節 Aの三 等価形態（続き）

第Ⅱ部：第3篇 第12章 第5節 マニュファクチュアの資本主義的性格（続き）

※ 編集人の復習ノートです。レジュメや参考書、議論を基に、読んだ箇所の要点や調べた結果をまとめました。

段落は、大月書店の全集版の本文の字下げと傍注の付け方で区切っていますが、原則通りでない場合もあります。段落番号の後の小さい字は、(原著ページ番号)と段落の出だしなどです。

第102回

第Ⅰ部 第1篇 第1章 第3節 価値形態または交換価値

A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態

X量の商品A=Y量の商品B または X量の商品AはY量の商品Bに値する。
(20エレのリンネル=1着の上着 または 20エレのリンネルは1着の上着に値する。)

三 等価形態

第5段落 (71)「商品の現物形態が価値形態になるのである。だが、…」 ～

商品の現物形態が価値形態になる条件。

- 商品Bの「使用価値がその反対物の価値の現象形態になる」のは、ただ任意の他の商品Aが商品Bに対してとる価値関係の中だけでのことである。
- どんな商品も、等価物としての自分自身に関係することはできない。従って、自分自身の現物の皮を自分自身の価値の表現にすることはできない。
故に、商品は他の商品を等価物としてそれに関係しなければならない。すなわち、他の商品の現物の皮を自分自身の価値形態にしなければならない。

「商品の現物形態が価値形態になる」は、等価形態の第一の特色「使用価値がその反対物の価値の現象形態になる」と同じ意味である、と、説明がありました。

第6段落 (71)「このことをわかりやすくするのは、商品体としての…」 ～

物体の重さの表現の仕方を例にした説明。

- 棒砂糖は重量をもっているが、その重量を見てとったり感じとったりすることはできない。
- ①そこで、その重量があらかじめ確定されているいろいろな鉄片を用意する。
②鉄の物体形態は、棒砂糖の物体形態と同様、それ自体としては重さの現象形態ではないが、棒砂糖を重さとして表現するために、棒砂糖を鉄との重量関係におく。
③この関係の中では、鉄は、重さ以外のなにものをも表わしていない物体とみなされる。
④それゆえ、種々の鉄量は、砂糖の重量尺度として役だち、砂糖体に対して単なる重さの姿、重さの現象形態を代表するのである。
- 鉄が重さの現象形態となるのは、ただ、砂糖などの物体が鉄に対してとる重量関係の中だ

けでのことである。

もし両方の物に重さがなければ、重量関係に入ることはできないし、したがって一方が他方の重さの表現に役だつこともできないであろう。

両方を天秤の皿にのせてみれば、それらが重さとしては同じものであり、したがってある割合では同じ重量のものでもあるということが、実際に分かる。

- 鉄体が重量尺度としては棒砂糖に対してただ重さだけを代表しているように、価値表現では、上着体はリンネルに対してただ価値だけを代表している。

棒砂糖と鉄の重量関係が、天秤によって、1個の棒砂糖＝5個の鉄片 となった場合を例とした説明がありました。棒砂糖の重さが5個の鉄片として表現されたということです。

第7段落 (71)「とはいえ、類似はここまでである。鉄は、棒砂糖の…」 ～

- 類似はここまで。
- 鉄は、棒砂糖の重量表現では、重さという両方の物体に共通な自然属性を、代表している。
- ところが、上着は、リンネルの価値表現では、価値という両方の物に共通な自然的ではない属性つまり純粋に社会的な属性を、代表している。

第8段落 (71)「ある一つの商品、たとえばリンネルの相対的価値形態…」 ～ (注21まで)

等価形態の謎……社会的属性が自然的属性に見える。

- 相対的価値形態は、たとえばリンネルの価値を、リンネルとは異なる上着によって表現する。この表現の仕方は、何らかの社会的関係を包蔵していることを暗示している。
- 等価形態については逆で、上着があるがままの姿で価値を表現しており、したがって生まれながらに価値形態をもっているということによって成り立っている。
ただし、これは、リンネルが上着を等価物とする価値関係の中でだけ認められる。
- 一般に、物の属性は、その物の他の諸物にたいする関係から生ずるのではなく、このような関係のなかではただ実証されるだけである。
故に、上着もまた、その等価形態を、直接的交換可能性というその属性を、重さがあるとか保温に役だとかいう属性と同様、生まれながらにもっているように見える。
- それだからこそ、等価形態の不可解さが感ぜられるが、この不可解さは、等価形態が完成されて貨幣となって経済学者の前に現われるとき、はじめて彼のブルジョア的に粗雑な目を驚かせる。彼は金銀の神秘的な性格を説明しようとするが、
20エシのリンネル＝1着の上着
という最も単純な価値表現がすでに等価形態の謎を解かせることには、気がつかない。

第9段落 (72)「等価物として役立つ商品の身体は、つねに抽象的人間労働…」 ～

等価形態の第二の特色：等価物を生産する具体的労働が抽象的人間労働の表現になる。

- 例えば、上着が抽象的人間労働の単なる実現として認められるならば、上着に実現される裁縫労働は抽象的人間労働の単なる実現形態として認められる。
- リンネルの価値表現では、裁縫労働の有用性は、それが衣服を作ることにあるのではなく、それ自身が価値であると見られるような物体、つまりリンネル価値に対象化されている労働と少しも区別されない労働の凝固であると見られるような物体をつくることにある。
- このような価値鏡をつくるためには、裁縫そのものは、人間労働であるというその抽象的属性のほかにはなにも反映してはならない。

ここでは、抽象的人間労働について議論がありました。具体的有用労働と違って、抽象的人間労働の概念は、一度分かったつもりでも、次に出てきた時には、何か、もやもやしたものを感ずることがあります。

第Ⅱ部 第3篇 第12章 分業とマニファクチュア

第5節 マニファクチュアの資本主義的性格

第11段落 (389)「本来のマニファクチュア時代、すなわち、…」 ～ (注85まで)

マニファクチュアが資本主義的生産様式の支配的な形態である時代に、マニファクチュア自身の諸傾向の十分な発達は多方面の障害にぶつかった。

- マニファクチュアは、労働者の等級制的編制をつくりだすと同時に熟練労働者と不熟練労働者との区分を作りだした。しかし、不熟練労働者の数は、熟練労働者の優勢によって、やはりまだ非常に制限されていた。
- マニファクチュアは、いろいろな特殊作業を、いろいろな労働能力に適合させ、したがって女や子供の生産的搾取を促すとはいえ、このような傾向はだいたいにおいて慣習や男子労働者の抵抗に出会ってくじけた。
- 手工業的活動の分解は労働者の養成費を下げ、したがってまたその価値を下げるとはいえ、いくらかむずかしい細部労働にはやはりかなり長い修業期間が必要であり、また、それがよけいな場合にも、労働者たちによって用心深く固執された。
例えば、イギリスでは、七年間の修業期間を規定する徒弟法はマニファクチュア時代の終わりまで完全に効力を保ち、大工業によってはじめて廃棄された。
- 手工業的熟練はマニファクチュアでも相変わらずその基礎であり、マニファクチュアで機能する全体機構も労働者そのものから独立した客観的な骨組みをもっていないので、資本は絶えず労働者の不従順や無規律と戦った。
 - 「人間性の弱点が大きく現われて、労働者は、熟練すればするほど、ますますわがままになって取り扱いにくくなり、その結果、彼のひどい気まぐれによって全体機構に重大な損害を与えることになる。」(ユア『工場哲学』、p20)
 - ①16世紀から大工業の時代に至るまで資本はマニファクチュア労働者の利用可能な全労働時間を自分のものにすることに成功していなかった。
 - ②マニファクチュアが短命で、労働者の出入りにつれて一国にある自分の本拠を棄てて他国にそれを築いた。などの事実もそれを示す。

レポーターから、この段落では、マニファクチュアの問題点がまとめられており、マニファクチュアが行き詰まっていくことが書かれていると、報告がありました。

議論では、

- ・これは過渡期の話なのか？、移行期か？
- ・マニファクチュアに何か問題が生じたか？、障害にぶつかったということか？
- ・マニファクチュアは中途半端だったとかでは、ないのではないか？
- ・マニファクチュアは手工業から出られなかったということではないか？
- ・単純労働(の拡大)が不十分だったのではないか？

等々、いろいろな疑問や意見が出されました。

また、第13段落とも関連しますが、

- ・マニファクチュアがどうやって資本主義になっていったのか。マニファクチュアが発展して資本主義になったとは思えない。
- ・資本主義はマニファクチュアから生まれたとは書いてない。
- ・羊毛工業から資本主義が生まれてきたのではなかったのではないか。

等々、資本主義の発生について議論が続きました。

ここで、Aさんから、マニファクチュアに関連する『資本論』の記述について疑問に思われたことを調査・研究された結果をまとめた資料の提供がありました。12頁もありますが簡単に説明して頂きました。編集人は、マルクスに史実誤認があるのではという指摘に興味を引かれました。

第12段落 (390)「同時にマニファクチュアは、社会的生産を…」 ～

ファミニファクチュアは、社会的生産を全範囲に渡ってとらえることも根底から変革することもできなかった。

- マニファクチュアは、都市の手工業と農村の家内工業という幅広い土台の上に経済的な作品としてそびえ立った。
- しかし、マニファクチュア自身の狭い技術的基礎は、一定の発展度に達したとき、マニファクチュア自身によって作りだされた生産上の諸要求と矛盾するようになった。

第13段落 (390)「マニファクチュアの最も完成された姿の一つは、…」 ～

マニファクチュアが発展し、労働用具を生産するための作業場が生まれた。

- マニファクチュアの最も完成された姿の一つは、労働用具を生産するための、特に、既に充用されていた複雑な機械的装置を生産するための、作業場であった。
「このような作業場は、さまざまな度合いの分業を示していた。銚やのみや旋盤は、それぞれ、技能の程度に従って等級制的に編成された固有の労働者をもっていた。」(ユア)。

第14段落 (390)「マニファクチュア的分業のこの産物はまた…」 ～

労働用具を生産する作業場は、マニファクチュアを廃棄する、機械を生産した。

- 労働用具を生産するための作業場は、機械を生産するようになった。
- 機械は、社会的生産を規制する原理としての手工業的活動を廃棄する。
 - 一方では、労働者を一つの部分機能に一生涯縛りつけておく技術上の根拠が除かれる。
 - 他方では、同じ原理がそれまではまだ資本の支配に加えていた制限がなくなる。

ここでは「なぜイギリスで資本主義が発展したかが疑問だ。」という意見がありました。

※訂正とお詫び

「便り」前号、3頁、第8段落の要約の後の、編集人のコメントの最初の3行が、例会での検討内容と違っていたので次のように訂正し、お詫びします。

原文 「数百年も」とありますが……

訂正文 全集本文の「数百年も」について、マニファクチュア時代そのものが「16世紀の半ばから18世紀の最後の3分の1期まで」なので、レジュメはフランス語版にならって「百年以上」としています。これについて、「辞書に『数』とは『2から9』とあるので220年を数百年と表現することに問題はない」という指摘がありました。

例会に参加された皆様、申し訳ありませんでした。

<＊当ホームページ保管の「便り」は訂正済みです。>